

「深大寺蕎麦」を演じる

ほしひかる*

〇名画にチャレンジする人たち

幸田露伴に『観画談』という小説がある。画を凝視しているうちに、画中の舟頭に呼びかけられたような気がしたのか、画を観ていた男は思わず「今行くよ」と答え、絵の中に入っていった、というような話である。

この小説に触発された私は、後年『冥界の絵師』という題名で、現実と掛軸の中の絵とが通じ合っているような拙い小説を書いたことがある。



「裸のマハ」絵葉書より

【「十字架への道」
絵葉書より】

【「最後の晩餐」
ほし所蔵のレプリカより】

絵画に引き込まれるといえ、その魅力に誘われ、名画を「動く画」すなわち「映画」にした例はたくさんある。

①たとえば、ゴヤの『裸のマハ』(1801年)は、ビガス・ルナ監督によって映画化(1999年)された。

②フェルメールの『真珠の耳飾りの少女』(1665?年)も、トレイシー・シュヴァリエという作家によって小説(1999年)にされ、さらにピーター・ウォーバーが映画(2003年)にした。

③またブリューゲルの『十字架への道』(1564年)はレフマイエフスキという監督が『ブリューゲルの動く絵』(2011年)という映画にした

④しかし、それらより一番刺激だったのは、ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』(1495-98年画)を、ジョバンニ・ミコリという俳優が、絵の中のイエス+12人を1人で、感情込めて演じ、写真に撮り、それをつなぎ合わせてミコリ版『最後の晩餐』(2011年)を作成したことであった。その過程をNHKが放映していたが、私はその俳優さんの熱意に舌を巻いた。そして、彼に倣って前々から思っていたことを現実につつしてみようかという気になってきた。



【「真珠の耳飾りの少女」本の表紙より】

1. 『江戸名所図会 - 深大寺蕎麦』に挑む

深大寺そば学院という所で、蕎麦の講座をもたせていただいてから、もう数年になる。講座の名前は「深大寺蕎麦学」としている。地域に関係する蕎麦資料を集め、それを学ぶことが「地域蕎麦学」という考えからである。

深大寺地区に関係する蕎麦資料といえば、日新舎友蕎子の『蕎麦全書』、『江戸名所図会 - 深大寺蕎麦』、大田南畝の伝承などがある。

それらは、いわば深大寺地域のお宝であり、地域の人たちにとって財産であると思う。

そんなことから、そば学院では、そのうちの『江戸名所図会 - 深大寺蕎麦』の絵を観て、「何を学ぶか？」を語り合ってもらうことにしている。

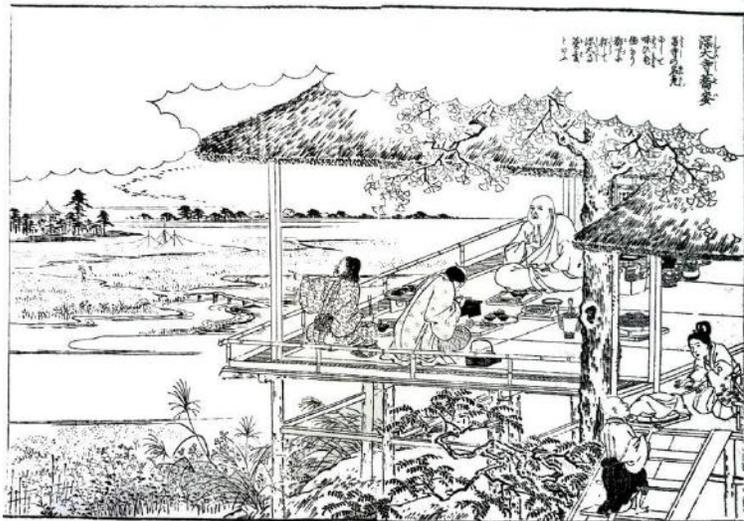
そこへ、上述のような『最後の晩餐』に挑んだ俳優ミコリの行為を知って、私も『江戸名所図会 - 深

大寺蕎麦』に挑んでみたいという気になったというわけである。

まずは、その『江戸名所図会』の何たるかを説明しなければならないだろう。『図会』は、題からも推察されるように「画による、江戸名所案内本」である。神田の町名主・齋藤家が3代にわたって、企画・編集・執筆・刊行を行った。

主として、企画・執筆は祖父齋藤幸雄(長秋)、執筆・編集は父幸孝(莞斎)、絵が長谷川雪旦。それを息子の幸成(月岑)が江戸後期の天保年間(1-3巻は1834年、4-7巻は1836年)に七巻20冊で刊行した。出版社は須原屋茂広と須原屋伊八である。

2.『江戸名所図会 — 深大寺蕎麦』を読む



【雪旦画『江戸名所図会 — 深大寺蕎麦』】

ここで、肝心の長谷川雪旦描く『江戸名所図会 — 深大寺蕎麦』の絵を見ていただこう。

その上で、さらに詳しく『江戸名所図会』の関係者たちを見てみることにする。

*齋藤市左衛門家

→ 幸雄(1737~99) → 幸孝(1772~1818) → 幸成(1804~78) →

齋藤家七代目の幸雄が、『江戸名所図会』の制作を考案した。

絵の深大寺の茶室に座しているのが、父の事業も引き継いだ8代目の孝幸であろう。

彼らの族譜は美濃齋藤氏の子孫だといわれ、末裔である神田齋藤家の当主は代々市左衛門を名乗っていた。つまり齋藤市左衛門幸雄・齋藤市左衛門幸孝・齋藤市左衛門幸成である。

*町年寄

江戸では町名主の上には「町年寄」御三家、つまり同じく家康公入府時に任命された、日本橋本町1丁目「奈良屋」の館市右衛門、日本橋本町2丁目「樽屋」の樽藤右衛門、日本橋本町3丁目の喜多村彦右衛門、があった。

さらに町年寄の上には幕府直轄の「町奉行」がいる。町奉行は呉服橋門内(現:千代田区大手町二丁目)の北番所と数奇屋橋門内(現:中央区銀座四、五丁目)の南番所があって、ほぼ交代で番を担当、現在は北番所の永田備後守正道が町奉行のお役に就いていた。

この町奉行 → 町年寄から下りてきたお触れを大家たちに伝達するのが町名主の役割で、これが江戸の町の縦組織であった。

名主は、他に人別改め、火の元の取締り、火消人足の差配、紛争や訴状の処理、祭礼の施行、町の予算の監査などと任務はかなり多忙である。

齋藤家は、神田雉子町・三河町三丁目・同四丁目・三河町裏町三丁目・同四丁目・四軒町(現:神田司町・小川町の一部)を管理していた。

故に、名主というのは人との交り幅が広がった。私は、齋藤家は寛永寺三十六房の幾つかとも行き来をもっていた。だから江戸を発つ前に、寛永寺筋から同じ天台宗の深大寺へ連絡をとってもらっていたと想像する。

*長谷川家

→ 金沢氏 → 長谷川雪旦(1778~1848) → 雪堤(1813~1882) →
父金沢氏は棚倉藩小笠原家に仕えていた。



【齋藤家邸跡】



【「三枚橋」重長画】

下谷三枚橋(現在の地下鉄仲御徒町駅付近)に住む。
雪舟 13代長谷川雪嶺に学ぶ。



【長谷川雪嶺画の絵馬】

*小笠原家

→ 棚倉藩小笠原長堯 → 唐津藩小笠原長昌(藩主 1817~23) → 小笠原長泰 →

別年表で見るように、雪旦は小笠原家の転封にしたがって、肥前唐津に赴いた。

余談だが、小笠原家が「陸奥棚倉」から「肥前唐津」へお国替になったのは詰まらない事件による玉突人事だった。

発端は、「浜松」の井上正甫が鷹狩の際にレイプ事件を起こしたことに因るらしい。

そこへ、かねてから中央進出を狙っていた「唐津」の水野忠邦が「浜松」へのお国替を願い出た。井上を罰さなければならなかった徳川幕府は、水野の願いを許した。となると、井上を何処かに移さなければならぬ。そこで小国「陸奥棚倉」へと追放となり、小笠原は「唐津」へ転封となった次第である。

唐津は陶磁器の国である。そこへ小笠原が入ってきた。お蔭で唐津は茶道が盛んになったのである。

雪旦は唐津に赴任し、茶道の絵を描いた。唐津には今も雪旦の作品が残っている。

*^{すうげつ}観嵩月(1755~1830)

絵師、深川六軒堀(江東区深川常盤町)の材木商筑島屋坂本米舟の子として生まれる、絵師・書画鑑定家、英一蝶の門人高嵩谷の弟子。雪旦を斎藤幸孝に紹介。



【亀田鵬齋ら「八百善」にて】

*亀田鵬齋(1752~1826)

八百善四代目栗山善四郎が 1822 年に刊行した『江戸流行料理通』は蜀山人・鵬齋が序文を寄せ、谷文晁、葛飾北斎らが挿画を描いて評判になり、江戸土産としても人気を博した。幸孝に『図会』に郊外編を加えることを提案。

*須原屋

・本店【須原屋茂兵衛】(日本橋通 1 丁目)

初代北畠宗元(万治年間に江戸へ出て、須原屋を創業) → 2代目 → 3代目慈庵 → 4代目恪斎恭(1731~82) → 5代目顕清祐武(1756~99) → 6代目顕光(1784~1803) → 7代目茂広(北畠分家治衛門吉祐と恪斎の養女との子(1776~1838) → 8代目有親(1806~60) → 9代目充親 →

・暖簾分

須原屋平助(日本橋通 3 丁目)、須原屋新兵衛(日本橋通 2 丁目)、須原屋伊八(浅草茅町 2 丁目(浅草橋・柳橋)、→ 浦和須原屋)、須原屋善五郎(本所五ノ橋町)、須原屋伊助(日本橋通 4 丁目)、須原屋市兵衛(日本橋室町 → 日本橋本石町 → 日本橋本町、須原屋文助(新右衛門町)

『図会』を出版したのは、本家 7 代目の茂広と、暖簾分の須原屋伊八である。

なお、あの「道光庵」の絵を残した絵師北尾重政は、この須原屋の息子である。もうひとつ余談になるが、須原屋の末裔は今も本屋として健在である。



【「道光庵」重長画】

念のために追記しておくが、「江戸文化」をリードしていったのは、彼らのように教養もあり、能力も高かった元武士たちであったことを知っておかなければなるまい。だから、彼らは町人であっても「斎藤市左衛門〇〇」という名をもつのである。

もう一度、『江戸名所図会 - 深大寺蕎麦』の絵を見てみよう。ここに描かれている「二人の町人と、住職はいったい誰か？」そして「この食事会は何年ごろ行われたのか？」

それを検討するために『江戸名所図会 - 深大寺蕎麦』年表として整理してみる。

1603年	(江戸開府)
1614年	常明寺 江戸蕎麦切初出 (『慈性日記』)
1662年頃	蕎麦屋「けんどん蕎麦」「正直蕎麦」が開店
1690年	寛永寺五世大明院公弁法親王 (『蕎麦全書』)
1778年頃	雪旦誕生 陸奥国棚倉藩小笠原氏臣金沢氏の子 下谷三枚橋(現在の地下鉄仲御徒町駅付近)に住む 雪舟 13代長谷川雪嶺に学ぶ
1780年	『都名所図会』吉野屋為八・秋里籬島・竹原春朝斎
1785年	『江都名所図会』鋏形恵斎(北尾政美)
1787年	(家斉、徳川 11代将軍に)
1789年以降	草創名主斎藤市左衛門家 7代目幸雄 『江戸名所図会』企画着手
1798年	須原屋茂兵衛・伊八が届けた『江戸名所図会』出版の許可下りる。
1799年	幸雄死去 斎藤家 8代目に幸孝
1801年	雪旦、観嵩月の紹介により幸孝と会う。
1809年	大田南畝、深大寺へ) 深大寺 75世義天周純死去 蕎麦喰うて鐘の音を聞く深大寺 深大寺仏知らずに蕎麦を喰う
1814年	深大寺 76世鳳旭 上野宝勝院へ転任、(深大寺 77世覚深)
1815・16年	雪旦・幸孝取材
1817年	小笠原長昌陸奥国棚倉藩から肥前国唐津藩へ
1818年	幸孝死去、斎藤家 9代目に幸成、雪旦唐津へ
1821年	唐津藩主に小笠原長泰へ
1822年	(八百善『江戸流行料理通』鵬斎・南畝・文晁・北斎)
1824年	深大寺 78世澄然一乗院へ転任、79世六雅堯徧
1829年	雪旦法橋に
1834年	『江戸名所図会』三巻 10冊上梓
1836年	『江戸名所図会』四巻 10冊上梓
1837年	(家慶、徳川 12代将軍に)
1838年	7代目須原屋茂兵衛死去
1839年	雪旦法眼に
1848年	長谷川雪旦死去
1878年	幸成死去

『図会』は、基本的には斎藤幸雄が企画・執筆、幸孝が執筆・編集、幸成が編集・出版したとされている。とくに幸孝の役割は大きく、彼の教養の高さと行動力がなければ完成しなかったといわれるが、何よりも幸孝は養子であったことが大きかったであろう。事業継続の義務感ならびにモチベーションは誰よりも高かったことが想像できる。逆にいえば、その能力を買われて養子に迎えられた可能性すらある。

ともあれ、その幸孝は観嵩月に絵師の人選を依頼し、1801年に長谷川雪旦を得ている。それから、1818年に幸孝が死去するまでの17年間、幸孝と雪旦の二人三脚は続くことになる。

学者中島利一郎の調べによれば、『郊遊漫録』に1815年ごろ府中・国分・谷保・芝崎を訪れていることが記録されているという。一帯から深大寺は近い。

とすれば、描かれている町人風の二人は、このころ訪れた**幸孝と雪旦**の他に誰が 있을까。

ちなみに、幸成が**1867年**に芝口の「ちとせ庵」で蕎麦寄鍋を食べたりしているなど蕎麦の記録が見られるが、息子の蕎麦好きは親譲りであったことが伺える。

このことを思えば、『図会』の中で蕎麦を食べているのが幸孝であり、住職と話をしているのが雪旦とみていだろう。

そして、もう一人の主演である深大寺住職はそのころは誰だったのか？

年表を見てみよう。

1809年、**75世**義天周純死去。

鳳旭が**76世**に就いただろう。

1814年、**76世**鳳旭が上野宝勝院へ転任。

覚深が**77世**に就いただろう。

続く、澄然はいつ**78世**に就いたのだろうか？

1824年、**78世**澄然一乗院へ転任。

六雅堯徧が**79世**に。

これから、描かれているのは**77世覚深**であることが推定されるだろう。

3. 『江戸名所図会 — 深大寺蕎麦』を演じる。

いよいよ、再現へ踏み出すことにする。

*まずは、再現江戸料理を再現されておられる**福田浩先生**にご相談してみると、「決め手は道具だよ」とおっしゃる。

「どういうことですか？」とうかがってみると、「料理の再現が一番の目的であることはいうまでもないが、食材などはもう昔に戻りようがないところがある。たとえば、江戸時代の醤油を使おうと思っても、それは大変なことだ。なぜなら、現代の醤油とはかなり違っているだろうから。しかし、道具だけは当時の物があれば、それを持ってこることができる。」

「なるほど道具か、」という課題を抱えていたころ、たまたまソバリエさんたちが集まる会があった。そして、これもまたたまたま隣に座っておられた**吉川真理さん**に食事の間、「深大寺蕎麦再現」の問題点として道具の話をした。

すると、彼女は「できますよ。どんな物が必要かおっしゃってください」とこともなげに言う。

何ということか！聞けば、建築士の資格をもつ彼女は、テレビドラマ用の舞台装置を作る会社に勤務していて、会社には小道具類もたくさんあるらしい。

さっそくながら、「深大寺蕎麦」の絵を見せて、**お箸、蒸籠、小椀、脚付膳、平膳、水指、大皿、煙草盆**などをお願いしたところ、すべて揃えられるという。

福田先生のノウハウからいえば、彼女の協力で「再現可能」となったのである。

*次が登場人物である。

幸い、現住職の**張堂完俊師**は『名所図会』に描かれている住職とそっくりである。さらに二人の町人は責任上、「門前」の店主**浅田修平さん**と私しかいない。小坊主役は深大寺執事の**林田堯瞬さん**が受けていただいた。小姓役は省略しよう。

*次が場所だ。

これについては深大寺には萱葺の茶屋があることを最初から目を付けておいた。というのも、浅田さんの調べによると、『分限帳』(1841年)に「深大寺には二間×九尺の広さの接待茶屋があった記録があるという。

さらに面白いことに、深大寺の玄関に水墨画が飾ってあるが、それが中国茶室の絵で、『図会』の茶室と雰囲気がよく似ているのである。



【深大寺の茶室】



【中国の庵】

*次は、蕎麦と料理だ。



【用意した料理】

肝心の蕎麦を打つ姿は、この絵には出てこないが、とうぜん座って打っていただろう。

蕎麦汁については大きな問題があった。画を観るかぎり、蕎麦猪口が見当たらず、大きな蒸籠の蕎麦を小分けして小椀で食べているのであった。

今まで、江戸初期の「寺方蕎麦」や『本朝食鑑』で見えてきたように「和えて食べ」ているのは明らかである。

しかし、時代は江戸後期の1800年代、蕎麦汁も《垂れ味噌》から《出汁+返し》へ進化していたはずである。

そこでわれわれが出した答が、物は進化しても食べ方は寺方流を守っている。つまり、小椀に入れた蕎麦に進化した汁の《かけ汁》を「和えて」、食べることにした。

食材・料理については、開高健に「土の唄」という言葉があるが、今の言葉でいえば「地産地消」が現実的であろうということから、農文協の多摩地方の郷土料理を参考にして考え、「門前」さんに依頼した。

蒲鉾については鈴廣さんに意見を聞くと、赤色の蒲鉾は当時なかったかもしれないということから、白にした。

野菜についても、江戸野菜研究家の大竹道茂先生に確認をとった。

お酒は、『寺方蕎麦』で見たように普通に供されたであろう。深大寺の執事林田さんも、江戸時代の寺院ではお酒も飲んでいたという。

料理	精進料理とお酒と和え蕎麦、椎茸、里芋、牛蒡、人参、大根、揚げ豆腐、がんもの煮付け、蒲鉾(鈴廣より寄贈)、
撮影日	平成25年11月14日午後2時
撮影会場	深大寺 茶室
出演	張堂完俊、浅田修平、ほしひかる、林田堯瞬
料理人	浅田一穂(「門前」)
総務	林田堯瞬(深大寺執事)
撮影	村上卓司、毎日新聞(岡礼子)、『歴史読本』(田河慶友)、
企画	『江戸名所図会 - 深大寺蕎麦』再現実行委員会〔張堂完俊(深大寺八十八世)、浅田修平(「門前」四代目)、ほしひかる(江戸ソバリエ協会)〕
協力	吉川真理(江戸ソバリエ)、大竹道茂(江戸野菜研究家)、福田浩(江戸料理研究家)、永山久夫(食文化史研究家)、株小田原鈴廣、毎日新聞、『歴史読本』、深大寺そば学院、深大寺一味会、

4. 絵の中に入って見て



【再現『江戸名所図会 — 深大寺蕎麦』】

終わりに、「演じてみて」というより、むしろ「絵の中に入って見て」と言った方が正しいかもしれないが、冒頭が動く絵の話から始めたので、それらしく登場人物の会話を織り交ぜながら“感想”を述べたい。

まず、些細なことから。蕎麦を観ると、大きい蒸籠は山盛りになっている。椀にも小分けしてある。さらに小坊主さんが大きい蒸籠を運んで来ている。

「昔の人は、そんなに大食いだったのか？」と思いがちだが、心配ご無用。時間を圧縮して描くのが、雪旦の画法である。山盛りの大蒸籠、それを小分けする。また追加する。その動きを紙の上で一度に画いているのである。物には嘘はないが、画法においては注意しなければならない。これは観画のコツである。

それから、「蕎麦」という視点から、重要な感想を述べなければならない。それは極めて当然のことであるが、“一人で行く蕎麦屋は蕎麦単品”で事足りるが、“寺方蕎麦は、ご接待や食事会であるから、コース料理が主であって蕎麦は後段に出される”ものということである。

そもそもが、江戸からやって来た客人を接待する場合、やはり蕎麦だけというわけにはいかないだろう。

そう思って耳を傾ければ、彼らの会話が聞こえてくる。

住職が言う。「この椎茸は横内さんという深大寺農家の人が作って、第42回東京都農業祭で東京都知事賞をもらったものだ。こっちの里芋は大坂さんという人が作って、明治神宮宮司賞を受賞した」云々…。

雪旦は辺りの景色について住職に尋ねながら、今まで描いてきた接待茶屋での会席や宴遊などの絵を振り返っていた。

- ・「品川の汐干」舟上での食事会、
- ・「不忍池の蓮見」料亭での会食、
- ・「龍眼寺の萩見」庭園での宴席、
- ・「海晏寺の紅葉見」庭園での会食
- ・「二軒茶屋の雪見」大料亭での大宴会、

そして雪旦は思った。この深大寺におけるご接待もそうした風流な食事会の絵の一つになるだろう、と。

そうしているうちに、後段の深大寺蕎麦が運ばれてきた。



【『江戸名所図会』より、
汐干・蓮見・萩見・紅葉見・雪見の宴】

住職は「寛永寺の公弁法親王様が、風味がいいと仰った…」と誇らし気に解説した。幸孝は、「これが名高い深大寺蕎麦か」といわんばかりに一所懸命に食し始めた。それを見た雪旦は、斎藤幸孝が蕎麦好きであったことを記録に残すために彼の姿を描こうと思った。

して、深大寺を辞した斎藤幸孝と雪旦は、こんな会話を交わした。

「深大寺の秋蕎麦、旨かった。それにしても、われわれ江戸人は何と粋な生活をおくっていることだろうか。汐干、蓮見、萩見、紅葉見、雪見、季節ごとに風流な宴を楽しんでいる。これが『江戸の文化』というものではないのか。」

「私もそう思う。ただし、今日深大寺を訪れて、その風流な江戸文化の源は『寺方』にあるのではないかという気がした。」

《参考》

- ・ゴヤ「裸のマハ」
- ・ビガス・ルナ監督『裸のマハ』
- ・ヨハネス・フェルメール「真珠の耳飾りの少女」
- ・トレイシー・シュヴァリエ『真珠の耳飾りの少女』
- ・ピーター・ウェーバー監督『真珠の耳飾りの少女』
- ・ブリューゲル「十字架への道」
- ・レフマイエフスキ監督『ブリューゲルの動く絵』
- ・レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晚餐」
- ・ジョバンニ・ミコ『最後の晚餐』
- ・ほしひかる『冥界の絵師 = 小説 陰翳礼讃』（「日本そば新聞」平成 27 年 5 月 15 日号）
- ・ほしひかる「深大寺蕎麦、風味甚だ美味である」（「日本そば新聞」平成 19 年 3 月 15 日号）
- ・ほしひかる「小説『深大寺蕎麦』（「日本そば新聞」平成 26 年 10 月 15 日号）
- ・『江戸名所図会』
- ・『絵本 浅紫』
- ・栗山善四郎『料理通』（教育社）
- ・開高健『ロマネ・コンティ・一九三五年』（文春文庫）

- *ほしひかる
- ・特定非営利活動法人 江戸ソバリエ協会 理事長
 - ・エッセイスト
 - ・深大寺そば学院 學監

[終]